

養育者のきょうだい間調整方略と 幼稚園における幼児の対人行動との関係

今川 真治・久佐麻衣子¹

(2009年10月6日受理)

The Influence of the Mother's Intervention Style in the Sibling Interaction
on the Social Behavior of Their Firstborn Child in the Kindergarten

Shinji Imakawa and Maiko Kuza

Abstract: The aim of this study was to elucidate the influence of the mothers' intervention styles in the sibling interaction at home on the social behavior that her firstborn child shows in the kindergarten. In a questionnaire, mothers answered that they mostly praise the firstborn child when he/she interacts friendly with younger sibling, and they tend to scold the firstborn child when he/she interacts agonistically with younger sibling, or mothers inform the firstborn child of the feelings of the younger child. Mothers tended to intervene in their girls than boys in the sibling interaction. Ten mothers were classified into three groups according to their intervention styles in their children's interaction at home, first-child intervention group (5 mothers), second-child intervention group (3 mothers), and equally intervention group (2 mothers). The firstborn children of the second-child intervention group showed more social behaviors than the children of the other two groups.

Key words: mothers', intervention style, firstborn child, social behavior

キーワード：養育者、きょうだい間調整方略、第一子、対人行動

1. はじめに

2006年に行われた第13回出生動向基本調査で、完結出生児数が2.09人となり、約30年続いていた2.2人程度から急減したことにより、少子化が加速するとして問題となったことは記憶に新しい。しかし、同調査によれば、一人っ子は全体の10%前後にとどまり、二人きょうだいが全体の50%以上を占めていることから、多くの子どもは家庭内できょうだいと共に生活しているという状況に大きな変化はない。

きょうだいの存在は、青年期を過ぎるまでは、性格形成や社会性の発達に大きな影響を与えるとされる(依田, 1990)。特に幼児期の子どもは、きょうだいと

の間で、きょうだいげんかを始めたさまざまなコンフリクトを経験するが、競争や奪い合い、嫉妬、からかい、悪口などの反発的相互交渉の経験は、相手の気持ちを推測したり、相手の立場を考慮する社会的スキルの基礎ともなり、他者との間に良好な対人関係をつくるための学習機会を与える。また、きょうだいと仲よく遊ぶことや連帯感を感じる体験も、相手を思いやる心を育てていく上で重要である。

依田(1990)は、親子関係が「タテ」の関係、友だち関係が「ヨコ」の関係であるなら、きょうだい関係は、「タテ」の人間関係と「ヨコ」の人間関係を合成した「ナナメ」の関係であるとしている。きょうだいのいる幼児の場合、その経験する人間関係は、「タテ」の関係である親子関係から出発し、「ナナメ」の関係であるきょうだい関係を経て、「ヨコ」の関係である

¹ 広島県安芸郡海田町職員

友だち関係へと発展していく。きょうだい関係を家庭の中で経験した後に、家庭の外で友だち関係をつくることになることから、依田（1990）は、「きょうだい関係は友だち関係をつくる「橋わたし」の役割を果たす（p.87）」としており、きょうだい関係が、その後の対人関係の基礎となることを示唆している。

さて一方、養育者にとって、複数の子どもを同時に育てることは容易ではない。幼児期のきょうだいは、いつも協動的に相互作用をしているわけではなく、けんかなどの反発的な交渉も日常的であり、それが養育者にとって大きな負担となることは容易に想像できる。複数の子どもを同時に育てている養育者は、自身の負担を軽減させるためにも、子ども同士ができるだけ長い時間仲良く過ごしてくれることを願い、子どもに対してそのように関わろうとするであろう。

小島（1997）は、子ども同士の相互作用を調整する養育者（ここでは子どもたちに接する時間が最も長い養育者である母親）の行動を「きょうだい間調整行動」とし、家庭で母親がどのような調整行動をとっているかを明らかにした。彼は、母親の調整行動は、子ども同士の否定的な関わりを解消させるとともに、親和的な関わりを増進させるように方向づけられていることを見出した。小島（1997）によると、養育者はきょうだい間調整の方法として、相手の内的状態に関する発話や、両者の関わりを促す発話など、きょうだいの親和的な関わりを増進させるような発話や行動を多く表出しており、養育者のこれら行動によって、きょうだい関係は、一時的な否定的関係の解消にとどまらず、その後も親和的な関係へと発展するという。また、小島（2002）は、「きょうだいの争いは、両者の主張や欲求がぶつかり合う場だが、親の介入は、相手の意図や欲求を冷静に把握するうえで重要な役割を担っており、自分の行動をコントロールし、うまく解決に持ち込む能力の発達にも寄与するのではないか（pp.388-389）」とし、養育者のきょうだい間調整行動が、子どものコンフリクト解決能力の発達を促すことによって、きょうだい関係が親和的なものへと発展していくと考えている。

近年、多くの幼児は、通園可能な年齢に達すると幼稚園や保育園に通い、集団生活をはじめ。集団生活の中で、幼児には、3歳から4歳にかけて異年齢から同年齢への遊び相手の移行が見られ、4、5歳児では同年齢との交渉が定着し、仲間関係が対人関係の中心を占めるようになる（白井・杉野、2002a）。こうして幼児の対人関係の中に「ヨコ」の関係が現れるが、「ヨコ」の関係においては、社会的スキルとしての、他者との関係調整能力が必要とされる。この調整に大きな

影響を与えるのが共感性である。

Feshbach & Roe（1968）は、共感的な子どもは他の子どもの感情に対して感受性があり、葛藤する状況の中で他の子どもの視点をよく理解することができ、寛大で、協力的で、非攻撃的であるとし、共感の高さが社会的理解能力や思いやりの感情と行動に、そして反社会的、攻撃的行動の抑制能力に結びつくことを示唆した。澤田（1993）は、共感が、相手を援助する利他的な行動を動機づけたり、媒介する役割を果たしたりすることを指摘すると共に、子どもの共感発達に影響するものとして、人の感情に関する家族の会話をあげている。その上で、このような人の感情や内的状態についての母子間の会話の頻度には著しい個人差があり、その差異は子どもの後の行動に関係してくるとしている。さらに澤田は、子どもの共感発達にかかわる条件として、親以外の家族、すなわちきょうだいとの対人経験もあげている。きょうだいは、家庭内で一緒に遊んだりけんかをしたりするなかで特に同一の経験を共有することが多く、共感が生じやすい関係であることに加え、きょうだいがいることで、養育者の子どもに対する他方の子どもの感情や内的状態に関する会話が増えることが予測され、そのことが子どもたちの共感発達を促していることも考えられる。澤田（1993）は、年上の兄や姉が、弟や妹への日常の母親の養育的な応答の仕方をモデルにして模倣し、共感的応答の能力を身につけていく可能性を指摘している。

きょうだいを持つ兄は、家庭でのきょうだいとの相互交渉の中で社会性を学ぶ機会を多く与えられている。依田が言うように、きょうだい関係が友だち関係をつくる「橋わたし」の役割を果たしているのであれば、きょうだいを持つ兄は、仲間関係においても身に付いた社会性を生かして適切な対人関係を築くであろう。

一方、養育者の、きょうだい間の共感を促進するような調整行動は、相手の意図や欲求を把握する手助けをし、兄の、争いや葛藤をうまく解決する能力の発達に寄与している（小島、2002）。つまり、幼児が適切な社会的能力を身につけるためには、きょうだいとの相互作用のみならず、養育者の、兄の共感性を育むような調整行動が重要と言える。幼稚園4、5歳児は、「ヨコ」の関係が生活の中で多くの割合を占めるようになってきている一方で、他者の内的状態を推測する能力が発達し、他者の立場に立った共感がはじまる時期でもある。このような時期におけるきょうだいとの交渉の経験や、養育者からの調整のあり方は、幼児の共感発達に少なからぬ影響を与えるに違いない。

本研究では、きょうだいをもつ幼稚園の4、5歳児に着目し、養育者のきょうだい間調整行動の違いが、

幼児の幼稚園での対人行動にどのような影響を与えているかについて考察することを目的とする。

2. 研究方法

2-1. きょうだい間調整行動に関する質問紙調査

2-1-1. 研究対象者と質問紙調査の期間

本研究の観察対象園は、H市内のF幼稚園であった。本研究では、年長組に在籍する幼児のうち、2008年4月時点で長子であった9名中7名（男児4名、女児3名）と、年中組に在籍する幼児のうち、同じく長子であった9名中7名（男児3名、女児4名）の計14名を、後述する行動観察の対象とした。本項における質問紙調査の対象者は、観察対象児の養育者14名であった。

質問紙配布時に、「回答は、ご家庭でお子さんたちの様子を最もよくご存知の方をお願いします」と依頼をしたところ、回答者はすべて母親であった。回収数は10部で、有効回答数も10部であった。回答を得られた家庭の第一子の年齢は、平均5.7歳（レンジ：4.6-6.5歳）、第二子の年齢は平均3.4歳（レンジ：2.0-4.6歳）、第一子と第二子の年齢差は平均2.3歳（レンジ：1.2-4.5歳）であった。Kruskal-Wallis検定（以下検定はすべて同じ）の結果、第一子の年齢、第二子の年齢、きょうだい間の年齢差には、いずれもきょうだい構成による差はなかった。表1にアンケートに回答のあった養育者の子どもの年齢ときょうだい構成の詳細を記す。

表1 調査対象者の年齢ときょうだい構成

	きょうだい構成				Total (n=10)	H
	兄弟 (n=4)	兄妹 (n=1)	姉弟 (n=2)	姉妹 (n=3)		
第一子の年齢	5.5	6.5	6.0	5.4	5.7	4.255
(SD)	(0.64)	—	(0.56)	(0.80)	(0.62)	
第二子の年齢	3.7	2.0	3.8	3.1	3.4	3.418
(SD)	(0.92)	—	(0.73)	(0.44)	(0.83)	
年齢差	1.8	4.5	2.2	2.3	2.3	3.967
(SD)	(0.64)	—	(0.17)	(0.37)	(0.90)	

2008年12月8日に質問紙を配布し、2008年12月19日までに回収した。

2-1-2. 調査項目

日頃養育者が子どもでもであるきょうだいに対してどのように調整行動を行っているのかを知るために、小島(1997, 1998)の研究を参考に質問紙を作成した。

この調査質問紙は、5つの質問から成る。このうち2つの質問では、きょうだいが親和的相互作用を行った事例をできるだけ具体的に挙げ、それに対して養育者がどのような調整行動を行うかを8つの選択肢の中

から選んでもらう形式とした。別の3つの質問では、きょうだいが否定的相互作用を示した事例を挙げ、同様に普段の調整行動を選んでもらうこととした。事例を事例するにあたっては、小島(1997)の子ども同士の相互作用の研究に関するカテゴリーを参考にし、ブロック遊び場面での相互作用を事例として使用した。

8つの選択肢は、小島(1997, 1998)が家庭場面における直接観察によって分類した養育者のきょうだい間調整行動のカテゴリーを参考に、4つが第一子に向けられる調整行動、残りの4つが第二子に向けられる調整行動に関するものとした。例えば、否定的相互作用が生じたときの調整行動の選択肢の内容は、①第二子（第一子）を叱責する、②第二子（第一子）から注意をそらす、③第二子（第一子）との親和的な関わりを促す、④第二子（第一子）の内的状態を伝える、の4種類、8項目とした。回答にあたっては、⑤その他を加えた9つの選択肢の中から普段よくとると思う行動を3つまで選び、よくとる順に1～3の番号を記入してもらい、分析にあたっては、これを得点化して用いた。

2-2. 幼児（第一子）の行動観察

2-2-1. 観察対象児

行動観察の対象としたのは、2-1-1で示した、長子である4、5歳齢の幼児14名（男児7名、女児7名）であったが、本報告の分析には、養育者からきょうだい関係調整行動に関するアンケートに回答のあった10名（男児5名、女児5名）のみを使用した。

2-2-2. 観察期間

対象児の観察は、2008年11月から12月の2カ月にわたり、1週間に2～4回、同幼稚園において行った。観察時間は、原則として観察対象児が在籍するクラスのおよそ8割が登園したと判断された9時20分頃から、設定保育に入るまでの自由遊び時間とした。

2-2-3. 観察手続き

(1) 観察方法

観察には対象児と非関与の自然観察法を用い、観察者は、対象児の発話や様子が記録できる範囲で、可能な限り児から離れた場所に位置し、あらかじめ作成したデータシートを用いて観察を行った。1名の対象児について1回の観察時間を5分とし、10秒の単位時間ごとに特定の行動が生じたか否かを記録するワン・ゼロサンプリング法(Altman, 1974)を用いて観察した。観察期間中に、対象児1人につき6回、合計30分の観察を行い、全対象児の総観察時間は300分であった。

(2) 行動カテゴリー

本研究においては、白井・杉野(2002b)の行動カテゴリーを参考に、本研究独自の行動カテゴリー

を作成した。観察記録を行った行動のカテゴリーは、大きく分けて、「提案行動」「向社会的行動」「傍観」「呼びかけ行動」「自己に関する言動」「依存的行動」「質問行動」「攻撃行動」「指示行動」から構成されている。それぞれのカテゴリーには下位カテゴリーが存在し、観察においてはそれぞれの下位カテゴリーの行動が生じたか否かを記録した。

3. 結果と考察

3-1. 養育者のきょうだい間調整行動

3-1-1. 養育者が調整行動を向ける対象

きょうだい間調整行動についての質問紙調査の結果をもとに、養育者が調整を向ける対象に着目したところ、主として第一子に調整行動を向ける養育者と第二子に調整行動を向ける養育者、第一子と第二子にほぼ同じように調整を向ける養育者があることが明らかとなった。そこで、第一子への働きかけが多い養育者の子どもを第一子調整群、第二子への働きかけが多い養育者の子どもを第二子調整群、第一子と第二子への働きかけ方に大きな差がない養育者の子どもを均等調整群として分類した。それぞれの群に分類された子どもは、第一子調整群が5名、第二子調整群が3名、均等調整群が2名であった。

3-1-2. 調整群ときょうだいの年齢差の関係

表2に、第一子の年齢と第二子の年齢、きょうだいの年齢差を調整群別に示す。第一子の平均年齢と第二子の平均年齢には、調整群による差は見られなかった。きょうだいの平均年齢差については、第一子調整群は2.1歳 (SD=0.24)、第二子調整群は3.3歳 (SD=1.03)、均等調整群は1.4歳 (SD=0.90) であり、検定の結果3群間に有意差が認められた ($H=7.64, p<0.05$)。

表2 調整群別に見た年齢特性

	調整群			Total (n=10)	H
	第一子調整群 (n=5)	第二子調整群 (n=3)	均等調整群 (n=2)		
第一子の年齢	5.7	6.0	5.1	5.7	1.324
(SD)	(0.74)	(0.59)	(0.54)	(0.62)	
第二子の年齢	3.6	2.7	3.7	3.4	1.586
(SD)	(0.81)	(0.75)	(0.83)	(0.83)	
年齢差	2.1	3.3	1.4	2.3	7.636*
(SD)	(0.24)	(0.03)	(0.29)	(0.90)	

*: $p<0.05$

この結果より、養育者は、きょうだいの年齢差が大きい場合は主に第二子に調整行動を向け、きょうだいの年齢差が小さい場合はきょうだいに対して同じ程度に調整行動を向けることが多いと思われた。

3-1-3. 調整群ときょうだい構成との関係

各調整群における第一子の性別を図1に示す。第一子が男児である養育者5人のうち4人は、第二子に調整行動を向けるか、きょうだいを均等に調整していた。他方、第一子が女児である養育者5人のうち4人は、第一子である女児本人に調整行動を向けていた。

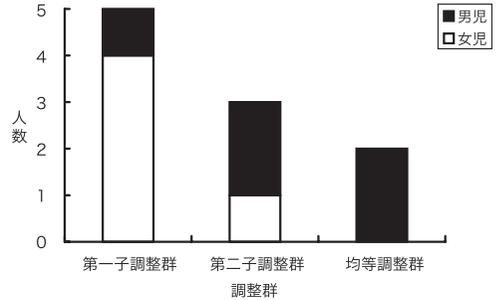


図1 各調整群における第一子の性別

各調整群におけるきょうだい構成を図2に示す。この図から、第一子調整群の第一子と第二子調整群の第二子、計8人のうち6人が女児であり、均等調整群の第一子と第二子は共に男児であった。

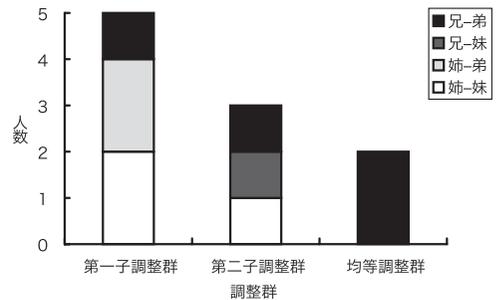


図2 調整群別のきょうだい構成

以上の結果から、養育者は、きょうだいのうち女児に調整行動を向ける傾向があることが明らかとなった。本研究において、アンケート調査に回答した養育者は全員が母親であったが、澤田 (1993) は、女児は母親から人の感情状態について、男児よりも数多く話しかけられていると述べており、母親が女児に関わりかけることが多いという一般的な傾向が、この結果に表れたのかもしれない。

3-1-4. 養育者が第一子に向けた調整行動

きょうだいの親和的相互作用に対して、養育者が第一子に向けて行くと回答した調整行動を図3に示す。

養育者のきょうだい間調整方略と幼稚園における幼児の対人行動との関係

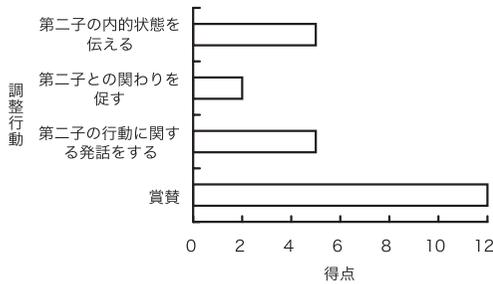


図3 親和的相互作用に対して養育者が第一子に向けた調整行動

きょうだいが親和的相互作用を示したとき、養育者は、「(第二子と)一緒にできたね」「(第二子に)上手に教えてくれているね」などと、第一子を直接に賞賛することが多いことがわかった。

次に、きょうだいの否定的相互作用に対して、養育者が第一子に向けて行うと回答した調整行動を図4に示す。

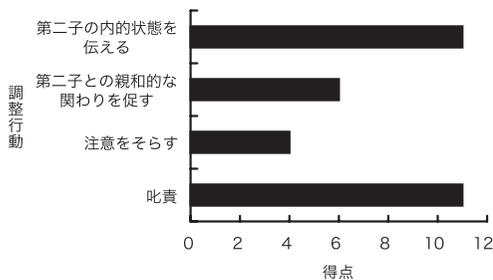


図4 否定的相互作用に対して養育者が第一子に向けた調整行動

きょうだいが否定的相互作用を示したとき、養育者は、「人に向かってブロックを投げたらだめでしょ!」「(第一子)がひとり占めするからだだよ」などと、第一子を叱責すると回答した。また、「(第二子)もこのブロックを使いたいんだよ」「(第二子)も(第一子)のそばで遊びたいんだよ」などと、第二子の内的状態を伝えることも多いと回答した。この結果は、小島(1998)が行った、家庭での観察において出現頻度の高かった母親の介入行動と一致していた。

3-2. 養育者のきょうだい間調整行動と幼児の対人行動との関連性

観察対象児の、30分あたりの対人行動の平均出現頻度を、調整群別に図5に示す。

9つの行動カテゴリーのうち、6つの行動については、第二子調整群の児の行動の出現頻度が、他群の児

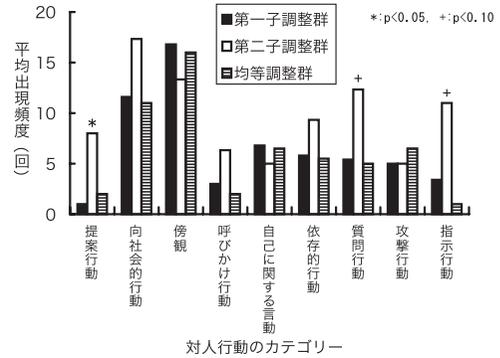


図5 調整群ごとの対人行動の出現頻度

と比較して高かった。検定の結果、提案行動については3群間に有意差が認められ ($H=6.60, p<0.05$)、質問行動と指示行動については傾向差が認められた (質問行動: $H=5.30, p<0.10$; 指示行動: $H=5.58, p<0.10$)。傍観と自己に関する言動の出現頻度は、第二子調整群の児においては、他群の児と比較して低かった。

この結果は、第二子調整群の児が、他児との関わりを多く持っていることを示しており、傍観や自己に関する言動という、他児との直接の交渉とは繋がらない行動が他群の児より少なかったことも併せて考えると、第二子調整群の児は、より積極的に他児に関わりかける傾向を持つことを示すと考えられる。

また、ほとんどのカテゴリーにおいて、第一子調整群の児と均等調整群の児の行動の平均出現頻度は、同程度であった。第一子調整群の児と均等調整群の児は、本人(第一子)が養育者から調整行動を受ける点では同じであり、第二子調整群の児は、本人が養育者から調整行動を受けることは少ない。このことが、第一子調整群の児および均等調整群の児と、第二子調整群の児との行動の違いの背景にあるのではないかと思われる。

提案行動の下位カテゴリーである「提案」と「勧誘」の平均出現頻度を、調整群別に図6に示す。「提案」と「勧誘」のいずれも、第二子調整群の児がこの行動を多く出現させていた。特に「勧誘」については、検定の結果3群間に有意な差が認められ ($H=7.93, p<0.05$)、下位検定の結果、第一子調整群の児と第二子調整群の児の間に、5%水準で有意差が認められた。

この結果から、養育者が第二子に対して調整行動を多く行う場合、その兄弟である第一子は、自分たちがしている遊びに他児を誘うなどをよくしていることになり、遊びの中で中心的な役割を持っているのではないかと思われる。

向社会的行動の下位カテゴリーの平均出現頻度を、

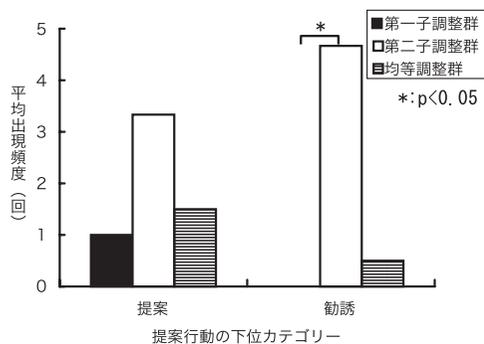


図6 調整群別にみた提案行動の平均出現頻度

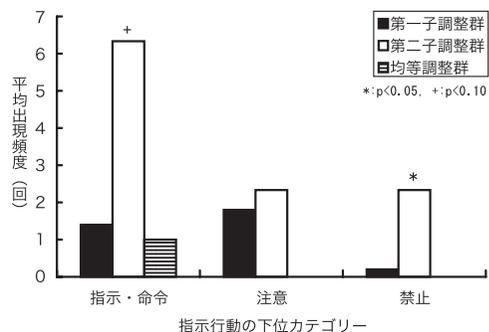


図8 調整群別にみた指示行動の平均出現頻度

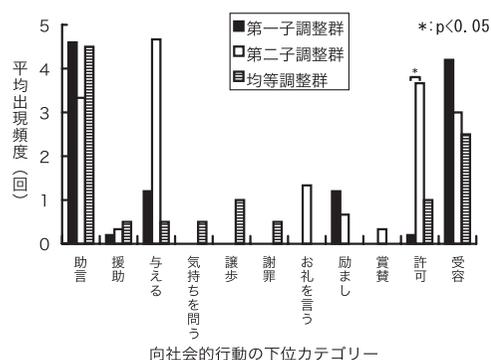


図7 調整群別にみた向社会的行動の平均出現頻度

調整群別に図7に示す。すべての調整群の児において、行動の平均出現頻度が高かったのは、「助言」と「受容」であった。「与える」と「許可」は、第二子調整群の児の出現頻度が他群の児よりも高く、「許可」については3群間に有意差が認められ ($H=7.59, p<0.05$)、下位検定の結果、第二子調整群の児は第一子調整群の児よりも許可を多く出現させていた。

第二子調整群の児には、「与える」や「許可」のような上下関係の要素を持った行動が多く見られる一方で、「お礼を言う」や「賞賛」の出現頻度も高かった。このことは、第二子調整群の児が、単に仲間に対して支配的に関わっていたというわけではなく、より適切な社会的スキルを身につけていることの表われではないかと思われた。

指示行動の下位カテゴリーの平均出現頻度を、調整群別に図8に示す。第二子調整群の児においては、「指示・命令」が多く観察され、その出現頻度は、「注意」と「禁止」の3倍近くにのぼった。検定の結果、「禁止」について3群間に有意な差が認められ ($H=6.30, p<0.05$)、「指示・命令」についても3群間に傾向差があった ($H=5.06, p<0.10$)。

他方、第一子調整群の児における「指示・命令」と「禁止」の出現頻度は、第二子調整群の児と比較すると小さかった。また、均等調整群の児における「指示・命令」の出現頻度も第二子調整群の児と比較すると小さく、均等調整群の児には「注意」と「禁止」は全く観察されなかった。

この結果から、第二子調整群の児は、他児に対して様々な指示行動を多く行うことがわかり、養育者が第二子に対して行っている調整行動としての指示行動を模倣している可能性が考えられた。

3-3. 第二子調整群における養育者の調整の特徴

ここまで見てきたように、第二子調整群の児には、提案行動や質問行動、指示行動などが多く見られ、彼らは、他児との関わりのなかで中心的な役割を持っているのではないかと思われた。また、第二子調整群の児には向社会的行動も多く観察される傾向があったことから、第二子調整群の児は他群の児よりもより高い共感性を持っているのではないかと思われた。

各調整群の養育者の、第一子と第二子に対する調整の向け方を比較すると(図9と図10)、第二子調整群の養育者の特徴として、親和的相互作用に対する調整は第一子よりも第二子にやや多く向けるだけであるのに対し、否定的相互作用については、より多くの調整を第二子に対して向けていたことがあげられる。

きょうだいがおもちゃを取り合い、投げるなどといった否定的相互作用示した時、第二子調整群の養育者は、「○○ちゃん(第一子)は、使いたかったブロックを取られていやだったんだって」といった調整行動を、より多く第二子に向けると回答していた。この調整は、養育者が第一子の側に共感したことから生じるものであるが、養育者がこのように第二子に語りかけられているとき、第一子は両者のそばにいるため、自分の気持ちが養育者に理解されていると感じる経験を得ることに繋がるであろう。養育者の共感性は、子どもの

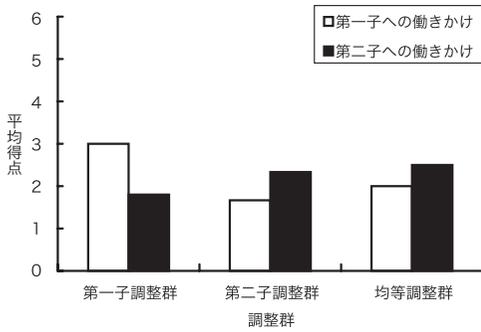


図9 親和的相互作用に対する養育者の調整行動

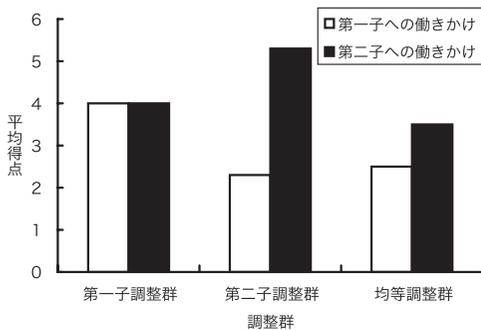


図10 否定的相互作用に対する養育者の調整行動

共感を促進する(澤田, 1993)とされるが, 第二子調整群の第一子は, このような経験を通して, 他児への共感性を発達させ, 他児に対する向社会的行動を多く示すようになったのではないかと考えることもできよう。

4. 論議

4-1. 母親の調整行動の特徴

養育者は, きょうだい親和的に関わっているときには, 第一子の行動を直接的に賞賛するに留める一方で, きょうだいがけんかするなど否定的に関わっているときには, 第一子の行動を直接的に叱責するだけでなく, 第一子に第二子の内的状態を伝えるという調整を行うと回答した。養育者が内的状態を伝える行動を頻繁に行う理由について小島(1998)は, 「否定的行動と第二子の内的状態との関連づけを明確にし, 第一子が自発的に否定的行動を制御できるように導くため」と述べている。本研究の結果も, 養育者が, 第一子に第二子の気持ちを考慮しながら行動できるようになってほしいという期待の表れと考えることができよう。

一般的に, きょうだいの年齢が近いと, きょうだい間の力量の差が小さいため, けんかや嫉妬, 競争といったきょうだい間の否定的相互作用が起りやすい。年齢の近いきょうだいの養育者が, きょうだいを均等に調整していたという本研究の結果は, きょうだいの相互作用を調整する際, 養育者がきょうだいの力関係が拮抗していると捉えていたことによるのかもしれない。きょうだいの年齢が近い場合には, きょうだい間の優劣や力関係が変化しやすいことになるため, 養育者は状況に応じて調整相手を適切に選択しなければならない。きょうだいに対する調整が同等に行われたのではないかと考えられる。

これに対し, きょうだいの年齢差が大きいほど子育てはしやすいと言われている。例えば, 第二子の誕生時に, 第一子は不安や第二子への嫉妬を感じて赤ちゃんがえりをすることもある(依田, 1990)が, 第一子がすでに弟妹が生まれたという状況が理解できる年齢であると, 弟妹の誕生を受け入れやすい。アイゼンバーグ(Eisenberg, 1995)は, きょうだい間の向社会的行動は, きょうだいの年齢が離れている方がよく生起し, 年長の子どもから年少の子どもへの向社会的行動は, その逆のパターンのものよりもはるかに多いとしている。本研究でも, 年齢差の大きいきょうだいにおいて, 養育者が主に第二子に調整を向けていたが, きょうだい間の相互作用を調整するとき, 養育者が第一子の発達を評価していることによって, むしろ第二子の社会性の発達の手助けをしようとしていたことによると考えることもできる。

4-2. 調整群ごとの幼児の対人行動の特徴

第一子調整群の児と均等調整群の児に観察された対人行動の量は, 全体として第二子調整群の児よりも少なかった。これら2つの群には, 第一子が養育者からの調整を受けることが多いという共通点があるが, 小島(2007)は, 仲間関係やきょうだい関係において, すでに子ども同士でうまく関係を調整できるのに, 親が必要以上に介入を続けることは, 仲間関係やきょうだい関係にマイナスの影響を与えると述べている。養育者が児の対人関係に必要な以上に介入することは, 児の対人行動を消極的にさせることが考えられ, 家庭で繰り返されるそのような経験が, これら2つの群の児の対人行動に抑制的に働いた可能性も考えられる。

他方, 第二子調整群の児には, 提案行動, 向社会的行動, 呼びかけ行動, 質問行動, 指示行動といった, 他児と積極的に関わり, 遊びの中で中心的な役割を持つような行動が他の2群よりも多くみられた。また逆に第二子調整群の児には, 他群の児と比較して, 傍観や自己に関する言動が少なく, 均等調整群の児と比較

して攻撃行動が少なかった。傍観の少なさは、遊びの中で中心的な役割をもっていることと関係しているように思われる。また子どもは、最初は自己中心的であるが、認知的に成熟し経験を積むにつれて、より他人に目を向けるようになる (Eisenberg & Mussen, 1993) と言われており、自己に関する言動や攻撃行動の少なさは、これと関係しているのかもしれない。

社会性の発達要因として、共感が中核的な役割を果たしている (澤田, 1993) ことが広く知られている。澤田 (1993) は、共感性の発達に関わる要因として、養育者やきょうだいの影響をあげ、きょうだいが家庭にいて、養育者ときょうだいの3人以上の関係が成り立つため、他者の気持ちに関する会話が多くなされる上、特に年上の兄や姉は、弟や妹への日常の母親の養育的な応答の仕方をモデルにして模倣し、共感的応答の能力を身につけていくとしている。本研究における第二子調整群の児は、養育者が弟や妹に対して調整を向けている姿をモデルとして模倣し、共感的な応答能力を身につけていたのではないかと考えられ、興味深い。

本研究の結果は、家庭での「ナナメ」の関係であるきょうだいの相互作用に対して、養育者が日常的に第二子に対して多く調整行動を行う場合、その様子を間近で経験している第一子の共感発達が促される可能性を示唆した。また、第二子調整群の第一子は、そのことを通して、「ヨコ」の関係である友だち関係において、より多く社会的な行動を表出するのではないかと考えられた。

【引用文献】

- Altman, J. (1974). Observation study of behaviour: Sampling methods. *Behaviour*, 49, 227-267.
- Eisenberg, N. (1995). *思いやりのある子どもたち：向社会的行動の発達心理* (二宮克美・首藤敏元・宗方比佐子, 訳). 京都：北大路書房. (Eisenberg, N. (1992) *The Caring Child*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.)
- Eisenberg, N., & Mussen, P. H. (1993). *思いやり行動の発達心理 (第二版)* (菊池章夫・二宮克美, 訳). 東京：金子書房. (Eisenberg, N., & Mussen, P.H. (1989) *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge: Cambridge University Press.)
- 遠藤利彦 (1997). 社会的発達の生物学的基礎. 井上健治・久保ゆかり (編), *子どもの社会的発達* (pp.206-220). 東京：東京大学出版会.
- Feshbach, N. D., & Roe, K. (1968). Empathy in six and seven year olds. *Child Development*, 39, 133-145.
- 小島康生 (1997). 乳幼児期のきょうだい関係に関する行動発達研究：調整者としての母親の役割を中心に. *博士学位論文 (未公刊)*. 大阪大学. 大阪.
- 小島康生 (1998). きょうだい間の否定的相互作用と母親の介入行動. *家庭教育研究所紀要*, 20, 172-183.
- 小島康生 (2002). ヒト乳幼児のきょうだい関係. *心理学評論*, 45, 385-394.
- 小島康生 (2007). 乳幼児のきょうだい関係と仲間関係. 南徹弘 (編), *発達心理学* (pp.159-174). 東京：朝倉書店.
- 白井万土香・杉野鉄吾 (2002a). 幼児の対人行動の発達に関する研究. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 9, 315-330.
- 白井万土香・杉野鉄吾 (2002b). 幼児の対人行動に関する縦断的研究. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 10, 1-11.
- 澤田瑞也 (1993). *共感の心理学：そのメカニズムと発達 (第二版)*. 京都：世界思想社.
- 依田明 (1990). *きょうだいの研究*. 東京：大日本図書.